

地学、古生物学の世界から見る 地球を形づくる言葉

泉 賢太郎
(古生物学者)



「化石」という言葉を知って、多くの人がまず思い浮かべるのは恐竜？ 写真は1987年、米サウスダコタ州で発見されたティラノサウルスのスタン（愛称）。全身の約7割の骨が残っている。写真：Ardea / アフロ

たとえば「化石」という言葉を聞けば、必ず恐竜やアンモナイトが頭に浮かぶ。また、「大昔の化石のような人」というように、科学から離れて比喻や揶揄でも使われるほどに日常の言葉にもなっている。

しかし……、化石が科学的にはどれほどの時間を内包するものであり、どういう状態で保存され、どういう形状のものであれば化石として認定されるのか？ そこはなほだ覚束ない。「地層」や「岩」や「石」なども同様。地球を形づくる言葉へのイメージが曖昧であるということは、我々の地球への認識も曖昧だ、ということになる。

そこで、地学や古生物学といったホームグラウンドから「地球を形づくる言葉」を見てみる。

人を形づくる言葉

太古の地球。大昔の生き物。子どもの頃から、不思議なほど、これらの言葉に対して興味を惹かれてきた。それは今も変わらない。幸いなことに、現在は大学教員として、地学の研究や教育に携わっている。

少しばかり、昔のことを振り返ってみたい。

……と言っても、地質学的時間スケールでの「昔」ではなく、人間の生活の時間スケールでの「昔」である。記憶のある限りでは、太古の地球や大昔の生き物に興味を持った最初のキツカケは、自宅にあった子ども用の学習図鑑だった。

版元は覚えていないが、動物や植物や昆虫や魚など一通りのラインナップが揃っていた。その中で私が最も興味を惹かれたのが、大昔の地球や生命に関する図鑑だった。その図鑑は、約46億年前の地球の誕生から始まり、ページをめく

るごとに時代が進んでいくような構成だった。それぞれの時代はどんな環境で、どんな生き物が生息していたのか、イラストがふんだんに使われて臨場感たっぷり描かれていた。

例えば、できたての地球はマグマオーシャンと呼ばれる状態であり、地表はマグマ（溶けた岩石）の海で覆われていたらしい。また、ジュラ紀（中生代の真ん中の時代。約2億1400万年前〜1億4500万年前の約5640万年間）や白亜紀（中生代の最後の時代。約1億4500万年前〜約6600万年前の約7900万年間）には巨大な恐竜たちが陸上を闊歩していたことが化石の証拠からわかっている。幼少期の私は、この図鑑を見るたびに、「昔の地球や生き物は今とは全然違ったのか……！」とワクワクしていた。にわかには信じられないが、今とは全く違う世界が、過去には確かに実在していた。この「全く異なるものが過去に実在していた」という点が、私の中では、興味をそそらせた要因のど真ん中だったと思う。

なので同じ理由で、日本史や世界史も好きだった。地球や生き物の歴史も、社会や人間の歴史も、当時の私にとっては同じくらい非現実的に感じられて、その非現実としか思えないような出来事が過去に実際に起こっていたことに強

く惹かれた。大学受験が徐々に現実味を帯びたものとして迫ってくる高校生の頃、進路選択では相当に迷った。地球や生き物の歴史を研究できる理学部の地学科や生物学科に行くか、社会や人間の歴史を研究できる文学部の史学科に行くか、どちらにすべきか――。

そんな悩める一人の高校生の背中を押してくれたのは、一つの言葉だった。

「文系と理系で迷っているなら、理系の方が将来の進路や職の幅が広いから、理系にしたら？」

この一言で、私は理系を選んで理学部を目指すことを決めた。その言葉を投げかけてくれた人は、慶應義塾大学にいた。高校生だったある日、夏のオープンキャンパスで慶應大に行った際に、在学生と相談できるブースで在校生のお兄さんから聞いた言葉だ。このお兄さんとは面識があったわけでもなく、オープンキャンパスの日に初めて話した。そして後にも先にも会って話したのはこの日の一回だけだ。言い方はやや乱暴だが、見ず知らずの他人の言葉で人生の一大決断をしたということだ。なお理系の方が将来の幅が広がるかは自明ではなく、このお兄さんの個人の見解だということを申し添え



イギリス、ドーセットの海岸で地層中の生痕化石（古生物の生活の痕跡など）を計測する筆者。化石は生痕化石と体化石（生物の遺骸）などに分類される。写真＝筆者提供